

愛知の水産史—ノリ養殖の沿革—

井野川仲男

(2015年12月8日受付, 2015年12月28日受理)

The History of Fisheries in Aichi  
-The Development of Nori (*Porphyra spp.*) Cultivation-

INOKAWA Nakao\*<sup>1</sup>

はじめに

愛知県の水産史は、安政年間(1854~'60)に宝飯郡前芝村(現豊橋市)で始まった。当時の養殖方法は、天然採苗、簀(ひび)建て養殖であったが、種簀の移植によって県内各地に広まっていった。

戦後(1945年~), 沿岸漁業構造改善事業や水産業改良普及事業によって底びき網漁業からノリ養殖業へ転換誘導が進められる中、水平簀、人工種苗生産、浮流し養殖、冷蔵網の技術開発と普及で生産の安定と増大が図られた。

昭和40, 41年(1965, '66年)の大凶作では、過密養殖が原因とされたため、各地に設置されたノリ生産安定対策協議会で適正な漁場利用が図られ、過密養殖対策が確立したので、それ以降、極端な凶作年はなくなった。

昭和50年代には全自動ノリ製造機の普及も相まって、過剰生産・生産調整の時代を迎えることとなった。

一方、名古屋港、衣浦港、三河港の港湾整備事業や臨

海工業用地造成事業に伴い、優良なノリ養殖漁場となっていた浅海干潟の多くが失われたが、昭和年間までは、生産者の減少を生産性の向上で補い、年間10億枚、100億円の生産を維持してきた。平成に入ると(1989年~), 価格の低迷を始め、中部国際空港建設事業に伴う漁業補償、三河港域内の解散予定組合の解散、10年(1998年)以降顕在化した温暖化の影響等により転廃業が進み、最近では3億枚、30億円まで生産が減少している。

こうした中、鬼崎漁協では、組合直営の加工団地整備に着手し、26年度(2014年度)漁期から委託加工方式による生産を一部開始した。参加漁業者や商社の評価が高いことから、28年(2016年)3月の加工団地の完成が待たれるところである。

本文は、愛知県におけるノリ養殖の発展や特記事項について、筆者が愛知県水産試験場のウェブサイト(<http://www.pref.aichi.jp/soshiki/suisanshiken/0000073230.html>)に連載した「愛知の水産史」を基に取りまとめ

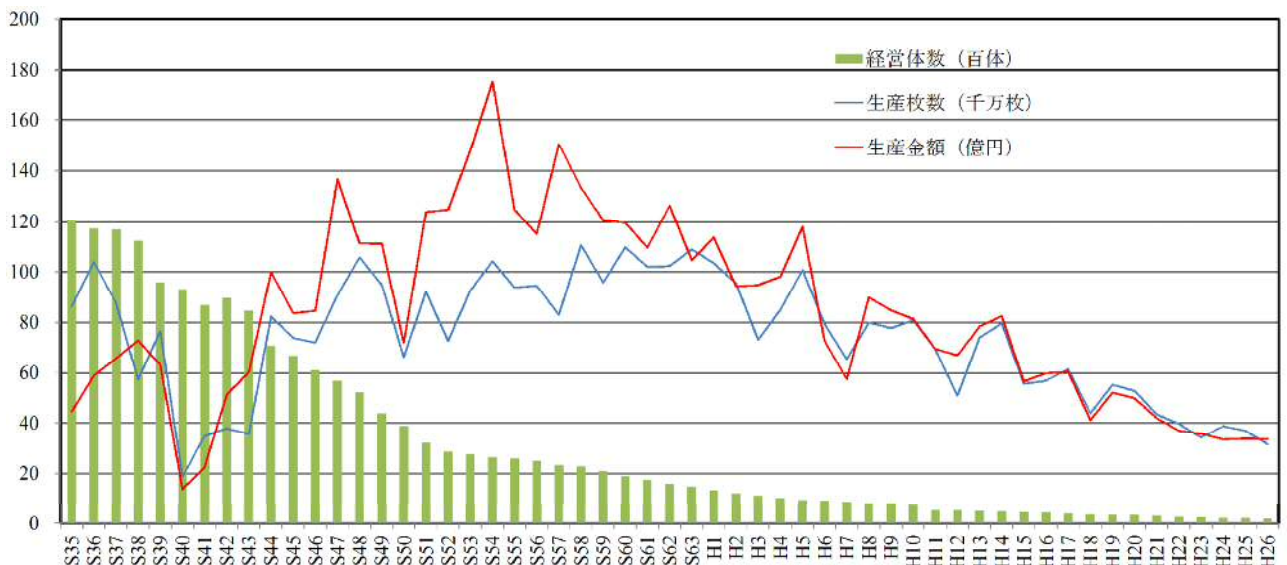


図1 愛知県のノリ養殖生産

\*<sup>1</sup> 愛知県水産試験場 本場 (Aichi Fisheries Research Institute, Miya, Gamagori, Aichi 443-0021, Japan)

た。

## 江戸時代

### —ノリ養殖の開始—

縄文の頃から海藻類が食されていたとされるが、文献（大宝律令、延喜式）ではアマノリ等が年貢として記録されている。

安政元年（1854年）、宝飯郡前芝村（現豊橋市）の空野甚七が、豊川河口で築建ノリ養殖に成功。数年のうちに、豊川河口西側の西浜（宝飯郡の梅藪村から御馬村）で普及した。

尾州におけるノリ養殖は、鍋田（現弥富市）付近で明治4年（1857年）に行われた檜枝による築建ノリ養殖が始まりとされる。獲れたノリは味・艶良く、尾張藩主が「蓬莱海苔」と名付けたが、三州宝飯郡のように大きく発展することはなかった。

## 明治年間

### (1) 漁場の拡大

安政年間（1854～'60年）に宝飯郡で普及を始めたノリ養殖は、明治27年（1894年）には、豊川河口南側の六条潟で試験が開始され、渥美郡牟呂村（現豊橋市）では29年（1896年）に養殖が始まり、31年（1898年）には、六条潟でノリ養殖が本格化した。

この頃から、「前芝のり」が、「三河のり」と呼ばれるようになった。

30年代には、ノリ養殖が西三河にも普及し、36年（1903年）には、碧海郡大浜町前浜や幡豆郡吉田村でノリ養殖が始まった。

39年（1906年）には、名古屋市の阿知輪兼吉が、天白川河口に前芝村から種籩を移植した。これを契機に、ノリ種付粗朶籩の移植が行われ、県内各地でノリ養殖が行われるようになった。

41年（1908年）、水産試験場は、岡村金太郎博士（日本海草学の開拓者）と協議して、「蓬莱海苔」を復興すべく宝飯郡前芝村（現豊橋市）から海部郡鍋田村（現弥富市）へノリ種籩移植を行ったところ、成績が良好だったこともあり、ノリ養殖が海部郡飛島村、同郡十四山村（現弥富市）、同郡南陽村（現名古屋市港区）、知多郡八幡村（現知多市）方面に普及するきっかけとなった。

### (2) 東三河地区における共同販売の開始

明治39年（1906年）、東三河地区のノリ生産者（西浜・六条潟のノリ生産者との資料あり）、販売業者で「三河海苔改良組合」を設立した。事務所は渥美郡役場（渥美郡

豊橋町、現豊橋市）内に置き、目的は品質・形状を規格化することで、三河のりの信用を高めること、業務はノリの蕃殖保護、販路調査、共同及び自由販売、製造検査、争議調停、博覧会・品評会と多岐にわたっている。

形状については、小判と大判の2種類に定められた。その大きさについては、豊橋市史によると、海苔樹（「すき枠」と同じ）のサイズが、小判では6寸8分×6寸3分（20.6cm×19.1cm）、大判では7寸5分×7寸1分（22.7cm×21.5cm）であった。これらの大きさは、現在使われている「すき枠」と随分異なっている。

明治45年（1912年）、同業組合法に基づく「三河海苔同業組合」が設立され、「三河海苔改良組合」の役割を引き継いだ。

## 大正年間

### —全国一の生産県となる—

豊川河口・六条潟でノリ養殖が行われて以降、ノリ養殖の普及が進み、大正年間（1912～'26年）においては、渥美郡では田原村・宇津江村・泉村（現田原市）、老津村（現豊橋市）、碧海郡では大浜村（現碧南市）、高浜村（現高浜市）、刈谷町（現刈谷市）で行われるようになった。

第1次世界大戦後の大正6年（1917年）から僅か5年後の11年（1922年）には、生産額が8倍に増え、養殖漁場面積（187万坪、617ha）とともに、全国一となった。

なお、15年（1926年）、知多郡水産会による知多西浜等のノリ製品検査が行われるようになると、そのノリは「あゆち（年魚市）海苔」と命名された。

## 昭和年間前期（戦前～戦中）

### (1) 愛知海苔

昭和3年（1928年）、ノリ製品の規格統一と品質向上を図るため、全国に先がけて県条例による製品検査規程を設け、県水産会に検査を委託した。

当時、本県産乾ノリは、豊川河口周辺では「三河のり」、海部郡では「蓬莱海苔」、名古屋周辺から知多半島では「あゆち（年魚市）海苔」、幡豆郡では「西三河地方の海苔」（？）と称し、地域によって様々な名称が用いられていたが、この県条例による検査以降、本県産乾ノリを一括して「愛知海苔」と称するようになった。

県水産会の検査内容については、横須賀町史に詳しく紹介されている。その概要を次に示す。

#### ・ 検査区分

第1区（海部郡）、第2区（愛知郡、名古屋市）、第3区（知多郡）、第4区（碧海郡）、第5区（幡豆郡）、第6区（宝飯郡、渥美郡）と県内を6地区に区分して

検査。

- 製品の寸法、重量、結束  
寸法は大判（22.7cm×21.5cm）と小判（20.6cm×19.1cm）の2種類（「三河海苔改良組合」と同一サイズ）。  
重量は期節によりそのつど決定。  
結束は、10枚を1帖、10帖を1束。
- 製品の種類  
種類は、黒のり（優等～5等）、青のり（優等～3等）、  
混のり（優等～5等）。  
基準は、原藻の良否、異雑物の有無、乾燥状態。  
このような統一的検査によって、「愛知海苔」の声価は年  
ごとに高まったと記されている。



図2 粗朶筭建ノリ養殖の摘採風景（昭和初期の六条潟）  
出典：牟呂漁協等（1981）六条潟と西浜の歴史

## (2) 垂直筭の限界

大正後期から昭和初期にかけて、ノリ養殖は、各地で養殖試験や移植試験が行われ、昭和3年～4年（1928年～29年）には、愛知郡熱田町、下之一色町、海部郡南陽町といった現在では名古屋市内となる沿岸地帯で、新産地が生まれた。

この当時の養殖方法は、垂直筭（粗朶筭）建式であったため、筭が設置できる漁場に制約があり、ノリ漁場の拡大は、昭和初期で一段落した。

水産試験場は、更なるノリ漁場の拡大を図るため、7年（1932年）、横須賀町養父（現東海市）で、漁場の制約を受けにくい水平筭による養殖試験を開始した（S17年、下之一色町での試験が最初との記録もある）。

なお、この水平筭の普及は、東京湾を始め先進県では戦前に終えていたが、本県では30年（1955年）前後と遅れた。

## 昭和年間後期（戦後）

### (1) 戦後の混乱期

戦後しばらくの間は、戦後の混乱と昭和25年（1950

年）の漁業制度改革を前に、新しい技術の開発や漁場の拡大などは見られなかった。

24年（1949年）にはイギリス人ドリュー女史がノリ糸状体を発見したが、水産試験場でノリ養殖技術への応用する研究が始められたのは、28年（1953年）になってからである。

この頃、垂直筭（粗朶筭）から水平筭への転換が始まった。水平筭には網を用いるが、この当時から網が安定的に生産されるようになったことも普及の背景にある。



図3 支柱筭養殖

### (2) 統制解除後のノリ販売

戦争前後のノリ流通は、昭和15年（1940年）の公定価格の制定、翌16年（1941年）の配給制度の実施によって統制されたが、敗戦を経て、22年（1967年）に統制が解除されると、各地区独自の方法で販売されるようになった。

名古屋地区（海部郡含む）及び衣浦沿岸2組合では市場出荷又は地元問屋との相対売り、碧海・幡豆郡では、地元問屋との相対売りで販売した。

知多郡西浜（上野～西浦の7組合）は、共同販売所を開設し、セリ入札で販売した。ノリ判は東京判（6寸3分×5寸8分（19cm×17.5cm））に統一された。

県漁連知多支部の他組合は、28年（1953年）、知多水産会館（知多市）で初市を開いたが、29年（1954年）2回汐から県漁連熱田共販所の共同販売（以下「共販」）に参加した。

東三河では、地元問屋との相対売りの他、宝飯郡等の12組合と問屋が22年（1947年）に設立した販売会社の生販共同市に出荷していたが、35年（1960年）、ノリ養殖関係22組合で東三海苔漁業協同組合連合会（業種別連合会）を設立して販売市を開催していた。なお、この連合会は、傘下の組合多数が三河港関連の漁業補償協定を締結したため、46年（1971年）に解散している。

### (3) ノリ漁場の開発

昭和 27 年（1952 年）、「浅海増殖開発事業」によりノリ、アサリ漁場の造成工事が水産試験場直営で開始され、33 年（1958 年）まで実施された。

水産試験場では、浅海開発用アングルドーザー 2 台（三菱 BB6 型×1、小松 D50 型×1）の購入、ドーザー積載船「第 1、第 2 なぎさ丸」（18 トン、木船）の建造を行った。

重機操縦者の確保が課題であったが、前芝・渡津・牟呂・大崎・田原・塩津・衣崎漁協からの推薦者 15 名を水試職員に採用し、この任に充てた。

30 年（1955 年）までの実績は、干潟耕耘 516 万坪（S27～30）、干潟整地 195 万坪（S27～30）、客土 13 万坪（S27～30）、深部耕耘 2 万坪（S28）、合計 727 万坪（ラウンドの関係で内訳と合計は不一致）であった。

水産試験場直営の漁場整備が終了した以降は、37 年（1962 年）、常滑市地先において、沿岸漁業構造改善事業により漁業団体が事業実施主体となって、ノリ漁場の保護を目的とする防波導流柵が設置され、同様の施設が知多郡美浜町野間地先、渥美郡渥美町（現田原市）福江湾沖に設置された。

また、岩場等において竹支柱に換わる鋼管柵の設置が、常滑市鬼崎地先、知多郡南知多町豊浜・大井地先で行われ、ノリ漁場の新規開発が進められた。

### (4) 「10 号線」と水平筏の普及

水産試験場は、昭和 25 年（1950 年）から東京大学及び関係漁協の協力により、ノリ漁場の潮汐を解析し、ノリ胞子の付着・生育に適した基準水位を確定した。この水位を「10 号線」と名付けた。

また、水産試験場はノリ胞子に関する試験も同時に行い、26 年（1951 年）頃、ノリ養殖の「水平筏操作基準」として取りまとめ、水平筏養殖法の普及を図ったところ、31 年（1956 年）までに一挙に転換した。

なお、「10 号線」を確定するための潮位観測は、28 年（1953 年）以降、水産業改良普及事業のノリ養殖関連事業として現在も続けられている。

### (5) 人工種苗生産

昭和 28 年（1953 年）、水産試験場が関係漁協の協力により、ノリ糸状体の培養、採苗試験を行い、翌 29 年（1954 年）には、糸状体培養条件や胞子の成熟・放出条件が確立し、人工採苗に目処がたった。

なお、種網の県内需要に対処するため、宮城県・福島県・千葉県等からの種網移植導入が盛んに行われた。丁度この頃は、前項「ノリ漁場の開発」で記したとおり、

ノリ漁場の改良造成による漁場の拡張で種網の需要が増え、県内の種網需給が逼迫していたことが理由である。種網移植は、人工採苗の進展に伴い漸減することとなる。

### (6) 県漁連による共販の開始

昭和 29 年（1954 年）、県漁連は、2 ヶ年の準備を経て、竣工間近の熱田海苔共販所（於熱田神宮東門前付近）で共販を開始した。

初市（1 回汐）は、名古屋市（下之一色、熱田、笠寺漁協）、海部郡（飛島、南陽、十四山漁協）、三河地区（高浜、前浜漁協）の 8 漁協が出荷した。2 回からは、知多郡西浜が参加し、初年度の出荷漁協は最終的に 19 漁協となった。

その後も参加を募ったこともあって、出荷漁協は年々増加し 37 年（1962 年）には 40 漁協となったため、熱田海苔共販所では捌ききれなくなったため、38 年（1963 年）7 月に、半田共販所と一色共販所を整備し、半田共販所では知多地区、一色共販所では幡豆地区、熱田共販所では、海部、碧海、東三河地区及び知多地区の一部を取り扱った。

半田共販所では、集荷量が増え、40 年（1965 年）には増築工事を行ったが、45 年（1970 年）の熱田共販所の閉鎖に伴い、同年、新築工事がなされた。また、一色共販所では増築工事がなされた。

46 年（1971 年）、東三海苔漁業協同組合連合会の解散に伴い、その事業を引き継ぐため、豊橋共販所が新築された。ここに、知多、西三河、東三河地区にそれぞれに共販所を有する 3 ヶ所共販体制が整った。

### (7) 浮流し養殖

昭和 34 年（1959 年）（一説には 35 年）、水産試験場が大井漁協と共同で「浮流しノリ養殖技術」を開発した。これにより、支柱を打てないような水深の深いところでもノリ養殖が可能となり、県内殆どの沿海漁協でノリ養殖が営まれるようになった。また、ノリ漁場が沖出しによって拡張され、ノリ生産の増大に大きく寄与した。



図 4 浮流し養殖



なお、ノリ養殖の三大発明、人工種苗生産、浮流し養殖、冷蔵網のうち、後者二つを本県水産試験場が開発した（宮城県も浮流し養殖を開発した旨主張している）。

#### (8) 鬼崎漁協

現在では県内一のノリ生産を誇る鬼崎漁協がノリ養殖を開始したのは、意外に遅く、昭和 33 年（1958 年）であった。

鬼崎漁協のホームページを見ると、「鬼崎は知多半島の常滑市、中部国際空港の北側に位置し、木曾三川よりの真水と海水がうまく調和した伊勢湾にあります。この自然の恵みをいっぱい受けた漁場で、昔から美味しい海苔を作っており、県内でもトップクラスの海苔生産地です。」と記されている。

鬼崎漁協のノリ漁場は、栄養塩に恵まれているが、風浪が強く、特に 35 年（1960 年）漁期の年末年始には季節風が吹き荒れ、波打ち際まで大波に洗われて支柱柵の大半に被害が発生した。他方、前記の「浮流し養殖」施設には被害が殆どなかったことから、翌年（1961 年）以降、浮流し養殖が施設の大規模化とともに普及していった。

#### (9) ノリ研究グループ

昭和 25 年（1950 年）頃からノリ養殖技術の変革が始まり、新技術の開発と改良、現地への実証適合試験のため、水産業改良普及職員の指導の下、各漁協ノリ研究グループの活動が活発に行われた。

研究グループの活動成果の発表・普及の場として、29 年（1954 年）には、県漁連内部組織の愛知海苔協議会主催の第 1 回愛知県のり研究発表大会が開催された（28 年とする資料有り）。

#### (10) 研究発表大会

昭和 32 年（1957 年）1 月、水産庁主催の水産業技術改良普及研究発表全国大会に出場する予選会として、県及び県漁連主催による昭和 31 年度水産業技術改良普及研究発表大会が開催された。本県では初めての取組であった。発表内容は、8 題中 7 題がノリ養殖、1 題がワカメ養殖に関するものであった。

愛知海苔協議会主催の愛知県のり研究発表大会も毎年開催されていたので、二つの発表大会が相前後して開催されることになった。

この二つの発表大会は、内容も重複していることから、両者を統合する機運があった。38 年（1963 年）の愛知県のり研究発表大会が 10 周年記念大会として開催され、一

区切りついたことから、39 年（1964 年）から両者を統合し、県及び県漁連の主催による「愛知の水産研究発表大会」として開催される運びとなった。

統合後初の大会（愛知県のり研究発表大会の開催回数を継承して第 11 回とされた）には、地区大会を勝ち抜いた 16 題が発表された（東三大会：18 題発表、うち 7 題県大会出場、知多大会：6 題発表、うち 4 題県大会出場、西三大会：9 題発表、うち 5 題県大会出場）。当時の漁研研究グループの高い研究意欲に敬意を表したい。

#### (11) 冷蔵網の開発

昭和 35 年（1960 年）には、県内で人工採苗が普及し、ノリ生産の安定、種網の自給、ノリ品種の選択が可能となったが、一方、過密養殖によってあかぐされ病等の病害が多発した。

潮間帯で生育するノリは、干出に強く、ある程度の乾燥に耐えて生存することができる。水産試験場研究員がこの性質を応用して、39 年（1964 年）、ノリ種網の冷凍冷蔵技術を開発したところ、急速に普及した。

病害の発生によって種網を駄目にしても、この「冷蔵網」を使えば、再びノリ養殖ができるため、ノリ生産は劇的に安定・向上した。

「冷蔵網」の普及に当たった当時の水産業改良普及員の話しを聞くと、漁協の冷凍庫の入口に陣取り、ノリ漁家が持ち込む種網に触って、乾燥具合を確認したそうである。

なお、ノリ種網の冷凍冷蔵技術という意味から「冷蔵網」と命名したが、他県では全海苔漁連も含め「冷凍網」という名称を使っており、悔しい限りである。

#### (12) ノリ漁場の施肥

栄養塩が豊富な河口域で開始されたノリ養殖は、技術革新によって、河口から離れた漁場でも行われるようになり、渇水の年などは色落ちし、その対策として古くから施肥が行われた（水産試験場では大正 4 年（1915 年）に試験実施の記録有り）。

浮流し養殖の開発により沖合漁場が増え、色落ちする漁場が続出したため、昭和 37 年（1962 年）から 2 ヶ年、農林水産協会の補助で、ヘリコプターによる施肥を各地で行い、効果を上げた。また、沿岸漁業構造改善事業により、37 年（1962 年）から施肥船の導入（県内で計 8 隻）も行われた。

45 年（1970 年）以降は下火となり、現在では、全く行われていない。

### (13) 乾海苔品評会

本県ノリ養殖漁業者の生産及び技術改善意欲を増進し、水産業の発展とノリ製品の品質向上並びに販路の拡張を図るため、昭和38年(1963年)2月、第1回愛知県乾海苔品評会が開催された。以降、第3回までは毎年開催されたが、40年(1965年)漁期の凶作で、開催がしばらく中断された。第4回が復活したのは、45年(1970年)3月のことで、農業祭(現在の農林水産祭)参加行事として開催されたので、農林大臣賞も授与されることになった。

なお、第4回で農林大臣賞を受賞した野間漁協のM氏(故人)は、その年の農業祭で名誉ある「天皇杯」を受賞し、「愛知海苔」の名声を全国に高めた。これには後日談があり、平成8、9年(1996、'97年)頃、M氏は本県初の天皇杯受賞者追跡調査の対象者となった。調査の結果、M氏の養殖技術が息子さんに上手く伝わらなかったのか、息子さんの代でノリ養殖業を廃業されていた。

### (14) ノリ生産安定対策協議会の設置

昭和40年(1965年)に続き41年(1966年)も凶作となり、就業者1人当たり生産所得で、漁業が製造業に逆転される原因となった。

このため、計画的生産体制の整備強化、漁場利用の合理化、漁場環境の整備保全・改良が必要となり、その推進組織として、42年(1967年)には、各地に「ノリ生産安定対策協議会」が設置され、種付け網枚数の制限など、ノリ網過密による不作対策に乗り出した。

過密養殖の防止、冷蔵網・浮流式養殖の普及の成果もあって、43年(1968年)には全国一に返り咲いている。

44年(1969年)以降、ノリ養殖は、養殖技術の定着もあって、いよいよ大量生産を迎えることとなる。

### (15) 知多と三河のノリ判の統一

県漁連の主催で共販されるノリであるが、ノリ判の大きさが、知多地区では小判(19cm×17.5cm)、三河地区では大判(21cm×19cm)と、知多地区と三河地区で異なっていた。

他県では大判規格を採用する漁連が殆どで、大判が全国の統一規格となると見通しを立てた県漁連は、昭和44年(1969年)漁期に間に合うように全ノリ養殖漁家の所有する「すき枠」を大判のものに取替えた。このことが仲買人から高く評価され、同年の共販では全国から多数の仲買人が参加した。

その後、化繊ノリ簀や全自動ノリ製造機の普及によって、ノリ製品の縮みが問題となったため、57年(1982

年)、「すき枠」を漁家負担で21.2cm×19.6cmのものに交換して解決した。

### (16) 共販の合理化

昭和43年(1968年)、県漁連は、各漁協が共販所に搬入するノリ箱を、漁協所有の亜鉛内張木箱(4,800枚入)から、県漁連支給のダンボール箱(3,600枚入)に代えるとともに、従来は、落札したノリを仲買人所有の容器に詰め替えていたものを、ダンボール箱のまま荷渡しすることで、時間と労力の軽減を図った。

また、45年(1970年)、県漁連は、見付け方法を変え、銘柄毎に見付けとセリを行っていたものを、初めに全銘柄の見付けを一括して行い、その後で銘柄毎にセリを行うことにした。不幸にも、その年の価格は低迷し、一括見付け方式が原因と漁業者から不評を買ったが、この方法は現在も定着している。

### (17) 計画生産の開始

昭和44年(1969年)以降、ノリ養殖は、優良品種の導入、特に多収性品種の選抜、沖合育苗施設の開発による早期冷蔵入庫、漁場行使の適正化と統一漁場管理の導入で、採苗後40日で摘採が可能となり、48年(1973年)漁期には史上最高の生産を上げた。

これが、繰越在庫量の増加をもたらし、単価の低迷と、折からの石油ショックと相まって、ノリ養殖経営を圧迫した。

ノリ業界は、49年(1974年)漁期から「計画生産」を導入し、需給バランスの正常化、経営の合理化、品質の向上を図り、適正価格の実現を目指した。

他方、50年(1975年)には「全自動製造機」が出現し、過剰生産に拍車をかけることになったので、経営的には無理が生じる結果となった。

### (18) ノリ種網冷蔵技術の特許問題

ノリ種網冷蔵技術の特許問題については、県漁連が昭和49年(1974年)に発行した「愛知の海苔・のり共販20周年記念」に詳しく紹介されており、要約すると次のとおりである。

本県は、40年(1965年)にノリ種網冷蔵技術の特許を知事名で申請すべく事務手続きを進めていた。ところが、既に39年(1964年)5月に特許人H氏他1名により発明の名称「冷凍冷蔵を応用して海苔を養殖する方法」が出願されていた。40年には全国的にこの技術が認められ普及していく状況にあったことから、今更この技術を一個人に権利化されてはならないと、41年(1966年)、全

海苔漁連の職員がこの特許出願に異議申し立てを行い、8年余の係争を経て、49年（1974年）5月に異議申立が認められた。

水産試験場や県内漁協ノリ研究グループが、30年代末頃から、国の指定試験研究の報告や、全海苔漁連の研究発表大会等において、冷蔵保存技術を公表している中で、H氏による出願で、どうにも腑に落ちない。なお、H氏は、多分、某国立大学の先生で、冷凍ノリに関する論文も執筆されており、専門家であることは間違いない。

#### (19) フリー系状体

昭和34年（1959年）、東北大学岩崎博士がフリー系状体の培養を開発した。水産試験場では、早くもその翌年の35年（1960年）からフリー系状体を作成し、ノリ養殖への利用試験を開始している。

56年（1981年）頃には、選別育種された優良品種のフリー系状体が広く普及した。

#### (20) 経営の合理化

昭和52年（1977年）から大型全自動製造機を導入しはじめ大量生産に拍車がかかり、需給バランスが崩れ、価格の低迷で、ノリ養殖経営は一段と厳しくなった。

水産試験場では、58年（1983年）からノリ養殖経営の実態調査に取り組み、適正な経営規模の確立、生産能力に見合った設備投資を検討した。ノリ養殖では経営改善に関する初めての取組であった。

### 平成年間

#### (1) 酸処理剤

昭和62年（1987年）頃から本格使用が始まったノリ養殖の「酸処理剤」は、千葉県漁連がアオノリ駆除を目的に開発し、54年（1979年）に販売を開始した「グリーンカット」が最初の製品である。当初は、製品イメージ、海域負荷等の諸問題から、千葉県を除いて全国的に使用が自粛されていたが、あかぐされ病や付着珪藻駆除等にも効果があること、59年（1994年）に水産庁より「海苔養殖における酸処理剤の使用について」が通達されてから、徐々に関係各県で使用されるようになった。

本県では、秩序ある使用を図るため、全漁連・全海苔漁連認定品の中から県漁連が選定した製品のみを使用してきたが、平成4、5年（1992、'93年）頃、海域環境に対する影響を懸念する漁業者グループが、酸処理剤の使用に強く反対し、水産庁を巻き込む大きな社会問題となった。

水産試験場では、水生生物への影響や海域における拡

散等の試験を行い、技術的な面から安全性をアピールした。

県漁連は、「酸処理剤の適正使用基準」や厳しい罰則規定を定め、監視体制を強化することで、適正使用の徹底を図った。

#### (2) 愛知県漁連海苔流通センター

昭和46年（1971年）、県内3ヶ所の共販所による共販体制が整備されたが、それぞれ老朽化が目立ち、特に半田共販所では地盤沈下による損傷が著しくなった。

また、3地区分散では1汐の共販に3日間も要すことや、出荷枚数がまとまらないなどもあり、買受人に不評であった。

平成元年（1989年）、県漁連は、共販所統合計画の検討を開始し、3年度（1991年度）新沿岸漁業構造改善事業（他に県単独補助事業、県漁連単独事業の合併事業）によって愛知県漁連海苔流通センターを半田市11号地において建設し、4年（1992年）3月に完成した。

この流通センターは、電算システムによる入札、採光に留意した見付場、効率の良い入出庫作業が可能な倉庫、広大な駐車場など、先進的な設備・機能を有している。



図5 愛知県漁連海苔流通センター

#### (3) 愛知のりフォーラム'95

ノリ養殖業は、需要の頭打ち、需要構造の変化（需要が高価格な贈答用から低価格な業務用にシフト）による価格の低迷、設備投資・償却費の増大などにより収益率が低下しており、経営体数の低減傾向や生産量の伸び悩み、不安定な生産状況が続いていた。

このような状況を打破しノリ養殖業の発展を図るため、今後のノリ養殖業の振興方向と方策の検討、その実現が喫緊の課題であった。

平成7年（1995年）6月、蒲郡市で開催された浅海増殖研究発表全国大会（主催：浅海増殖研究中央協議会）の関連行事として、県及び県漁連は、「愛知のりフォーラム'95」を開催し、「経営」をテーマとして、野田宏行三重大学教授（当時）をコーディネーターに迎え全国各地

の経営先進事例や、海外を含めた生産動向の報告などから、21世紀のノリ漁家の経営を検討した。

#### (4) 大井漁協ノリ養殖経営協業体

経営改善を具体化すべく、8年(1996年)から開始した事業が「のり養殖経営改善対策事業(国庫補助事業名:海面養殖業高度化推進事業)」であり、「知多東浜(片名,大井,美浜町漁協)」地区を対象に、地域特性を活かした経営改善策の検討を行った。

15年(2003年),大井漁協は、経営改善策に基づきノリ養殖協業体(大井水産:ノリ養殖漁家5戸で構成)を立ち上げ、20連式全自動ノリ製造機1式を有する加工場1棟を大井漁港に整備した。加工場の上屋は大井漁協が整備し、全自動ノリ製造機やその他の周辺機具は大井水産が整備した。

大井水産は、5戸の協業経営体でスタートしたが、26年(2014年)には3戸まで参加漁家数が減少した。管理柵数が殆ど減少していないので、採算は良い。

#### (5) 鬼崎漁協ノリ共同加工団地

鬼崎漁協は平成24年(2012年)からノリ共同加工団地の整備に着手し、その第1期工事の竣工記念式典が26年(2014年)4月に組合事務所で盛会に開催された。

ここに至る道は、必ずしも平坦でなく、特に18年度の「のり共同加工団地基本構想の取りまとめと常滑市長の同意形成」、19年度の「県予算化に関する財政課との調整」は、県・市の財政状況が厳しい中、極めてハードな仕事であった。これに携わったのが、前者が知多農林水産事務所H技師(当時,H27現在水産課主任主査)、後者が水産課S主査(当時,H27現在水産試験場主任研究員)の2名で、事業化に際しての最大の功労者である。

鬼崎漁協は、栄養塩の豊富な漁場を有するため、生産性の高いノリ養殖が可能で、生産枚数、生産金額、品質ともに高位安定し、ノリ生産では本県で最も重要な地位にある。

この地位を将来にわたって不動のものとし、単価の低迷、高い生産コスト、労働力の不足、加工場の環境問題など、地域が抱える課題に適切に対処するため、鬼崎漁港において、協業化や委託加工方式を経営の基本とした共同加工団地を整備することとなった。

19年(2007年)3月,鬼崎漁協は,地元選出国會議員,県會議員,市會議員,国関係者,県・市担当者を伴い,常滑市長に対して鬼崎新港(加工団地の用地造成)とノリ共同加工団地の整備推進を要請した。

この時に用いられた要請書「鬼崎漁業協同組合のり共

同加工団地基本構想」は、前述のH技師が中心となって作成した資料で、鬼崎漁協ノリ養殖の現状分析、課題抽出、課題解決に向けての様々な方策が検討された優れた内容であった。

また、県の予算化で苦勞したS主査は、当時を次のように振り返っている。

- ・ 異動1年目でいきなり新規事業の立ち上げに関わることとなり戸惑った。
- ・ 当時の漁港・漁場グループの同僚・上司のアドバイスに助けられたので、まさに、グループ全員で立ち上げた事業であった。
- ・ 同事業を活用する鬼崎漁協が起爆剤となり、本県ノリ養殖業が更に発展することを祈る。

鬼崎漁協ノリ共同加工団地の整備は、防波堤・泊地・係留施設・加工場用地等の基盤整備と、9棟(各棟全自動ノリ製造機1式)の共同加工場整備に大別される。

基盤整備は、20年(2008年)4月に着手され、25年(2013年)3月に概成した。共同加工場整備は、加工場を1ヶ年に3棟ずつ3ヶ年で9棟を整備する4ヶ年計画(24~27年度,初年度は設計のみ)であった。

26年(2014年)ノリ漁期は、第1期分3棟が初めて稼働した。その経営分析は、まだ行われていないが、仲買商社からは製品の品質が揃うと高く評価されている。また、漁業者からも製品の品質、労働面、経営面で高い評価を得ている。

課題としては、次の2点が考えられている。

- ・ 漁業者別に加工を行うため、漁業者が変わる毎に15分間程度のインターバルを設けているので、生産性の低下を招いている。
- ・ 漁業者は、加工作業が不要になった分、管理柵数の増大による経営規模の拡大を望んでいるが、ノリ漁場に余裕がないため、規模拡大が不可能になっている。



図6 鬼崎漁協のり共同加工団地 (H27/5撮影)

西三河地区では、ノリ養殖漁家のアサリ漁への転業が相次ぎ、26年(2014年)ノリ漁期は、経営体数が22経営体(5年前の27.5%),総生産額が428百万円(同40.4%)まで減少した。アサリのみ依存した漁業経営は危険と云わざる得ない。矢作川や矢作古川などの恵みを受ける



優れた漁場を有するだけに、ノリ養殖の再興を「鬼崎方式」の導入に活路を見いだすことができるのではないかと。

## 文 献

- 1) 東海区水産研究所（1981）三河湾・環境と漁業
- 2) 愛知県水産試験場（1955）愛知県水産試験場六拾年史
- 3) 愛知県水産試験場（1994）水産試験場創立百周年記念誌
- 4) 愛知県（2013）愛知県史資料編 24 近代 1 政治・行政 1
- 5) 愛知県（2000）愛知県史資料編 28 近代 5 農林水産業
- 6) 愛知県文化会館図書部（1980）明治以降愛知県史略年表 産業経済編
- 7) 愛知県（1949）愛知県水産業の現勢
- 8) 愛知県水産課（1950）水産要覧 昭和 25 年度版
- 9) 愛知県水産課（1951）愛知の水産 昭和 26 年度版
- 10) 愛知県農林部水産課（1955）愛知県水産現況 昭和 30 年度
- 11) 愛知県水産課（1956）愛知県水産要覧 1956
- 12) 愛知県農林部水産課（1957）愛知県の水産 1957
- 13) 愛知県水産課（1965）愛知県水産要覧 1965
- 14) 愛知県農林部水産課（1977）愛知県水産要覧 1977
- 15) 愛知県農業水産部水産振興室（1984）愛知県水産要覧 1984
- 16) 愛知県農業水産部水産振興室（1995）愛知県水産要覧 1995
- 17) 愛知県農林水産部水産課（2008）愛知県水産要覧 2008
- 18) 愛知県（1963～2001）漁業の動き 1963～2001
- 19) 愛知県（2002～2016）水産業の動き 2002～2016
- 20) 愛知県農林部水産課（1977）愛知県水産年表 昭和 20～50 年
- 21) 愛知県教育委員会（1968～'69）三河湾・伊勢湾漁労習俗緊急調査報告 第 I 集～第 II 集
- 22) 豊橋市（1982）豊橋市史 第三卷
- 23) 渥美町（1991）渥美町史 歴史編 下巻
- 24) 西尾市（1978）西尾市史 近代四
- 25) 吉良町（1994）吉良町史 近代・現代
- 26) 一色町役場（1987）一色町誌（1970 初版，復刻版）
- 27) 横須賀町長 白羽清一（1969）横須賀町史
- 28) 知多市役所（1981）知多市誌 本文編
- 29) 常滑市役所（1976）常滑市誌
- 30) 片岡英三（1987）名古屋南部史（1952 初版，復刻版）
- 31) 牟呂史編纂委員会（1996）牟呂史
- 32) 愛知県漁業協同組合連合会（1999）愛知県漁連五十年のあゆみ
- 33) 愛知県漁業協同組合連合会（1974）愛知の海苔のり共販 20 周年記念
- 34) 愛知県漁業協同組合連合会（1984）愛知の海苔のり共販 30 周年記念
- 35) 愛知県漁業協同組合連合会（1994）愛知の海苔のり共販 40 周年記念
- 36) 牟呂漁業協同組合・前芝漁業協同組合・梅菰漁業協同組合（1981）六条潟と西浜の歴史
- 37) 大崎漁業協同組合（1974）大崎漁業協同組合史
- 38) 鬼崎漁業協同組合 HP：組合のご紹介
- 39) 鬼崎漁業協同組合（2007）「鬼崎漁業協同組合のり共同加工団地基本構想」の概要
- 40) 故倉掛武雄氏業績刊行会（1991）倉掛武雄とその業績
- 41) 野田宏行・岩田静昌（1983）新編・海苔製品向上の手引き

愛知の水産関連年表（ノリ養殖関連）

西暦	和暦	月日	事 項
大宝 1 (701)			大宝律令の雑令中に「山川藪沢の利用は公私之を共にす」と定め、海川における漁業は万民の自由を原則とする趣旨
奈良時代 (710～'94) ～			三河湾の特産物として、タイ、アワビ、ナマコ、海藻類、塩が加工品として、都に出荷（「延喜式」主計帳に記載）
鎌倉時代			土豪・豪族が漁場の支配権を持つ（六条潟と西浜の歴史,S56/10）
室町時代			六条潟（豊川河口左岸側）・西浜（同右岸側）の農家がハマグリ、アサリを採取し、近隣村に販売（六条潟と西浜の歴史,S56/10）
江戸時代 (1603～1868)			この時代の漁業制度の思想は、「磯猟（いそりょう）は地付（じつき）根付（ねつき）次第なり、沖は入会（いりあい）」（漁場は地元の総有、漁業権は幕藩領主の支配下とされる）
寛永 12 (1635)			碧海・幡豆・宝飯 3 郡の年貢米の積出港として、御馬（現豊川市）、犬塚（現蒲郡市）、平坂（現西尾市）、鷲塚（現碧南市）、大浜（同）の五港が指定
延宝・天和年間 (1673～'84)			東京湾の品川・大森の漁師が海に筏を建てノリ養殖を開始、全国初の試み (次いで広島が宝暦年間 (1751～'64) に開始)
元文 5 (1740)			「三河国二葉松」に、宝飯郡の村名欄に湊として、三谷湊、御津湊、御馬湊、前芝湊の 4ヶ所が記載、その他海辺の村には磯が付され、不相磯、大塚磯、形原磯、西浦磯が記載
江戸時代～太平洋戦争			江戸時代以降、新田開発で、渥美湾、衣浦湾を中心に約 10,000ha の干潟が農地に転用（現三河湾面積の 1/6 に相当）
安政 1 (1854)			宝飯郡前芝村（現豊橋市）の柰野（もくの）甚七（銀右衛門）が豊川河口で築建（ひびたて）ノリ養殖に成功
安政 2 (1855)			宝飯郡前芝村（現豊橋市）で、ノリ養殖開始（H10 まで続く）
安政 4 (1857)			宝飯郡前芝村（現豊橋市）のノリ養殖業者 21 名（「愛知の海苔」のり共販 20 周年記念） 海部郡鍋田村（現海部市）のノリ養殖は、のり問屋市兵衛が尾張藩主の許可を得て開始（S38 まで続く）
安政 5 (1858)			柰野甚七が前芝・梅藪・日色野・平井・伊奈 5ヶ村庄屋に呼びかけ、ノリ漁場大拡張を吉田藩主に誓願（同年許可）
安政 6 (1859)			東三河のノリ養殖が宝飯郡梅藪村、日色野村、横須賀村（渡津）（以上現豊橋市）、伊奈村、平井村、下佐脇村、御馬村、西方村、沔野村（以上現豊川市）に普及（日色野・伊奈・平井・西方・沔野は S50 まで続く、渡津は S52 まで、梅藪・下佐脇・御馬は H10 まで続く）
元治 1 (1864)			ノリ養殖業者が白魚網業者と紛争（永禄元年頃から網運上を藩主に納め由緒正しい白魚漁師が、ノリ筏の枝が折れて白魚網に入ると筏の撤去を要求、庄屋の裁断で解決）
慶応 2 年 (1866)			筏場割り当てで、優先権のある前芝・梅藪 2 村に日色野・平井・伊奈 3 村が怒りを爆発させ紛争（8/26、3 村代表者が蓑笠に身を固め行動を起こしたことから「蓑笠騒動」という、柰野甚七が収拾に尽力、M2 に解決） 宝飯郡前芝村（現豊橋市）のノリ生産、65 戸、850 両（「愛知の海苔」のり共販 20 周年記念）
慶応 3 年 (1867)			宝飯郡前芝村（現豊橋市）のノリ生産、91 戸、1,260 両（「愛知の海苔」のり共販 20 周年記念）
1869	M2		「版籍奉還」で旧領主権が消滅
1875	M8	12/	海面の官有を宣言（太政官布告 195 号） 漁場使用は、旧慣が尊重されたが、各府県が国の意向を伺いながら実施
1877	M10		この頃、豊川河口でノリ養殖に従事する者約 400 人、生産額 5,600 円（「愛知の海苔」のり共販 20 周年記念：6,000 円）
1886	M19		漁業者のための組織が「漁業組合準則」（農商務省令第 7 号）で初めて制定

西暦	和暦	月日	事 項
1887	M20		この頃、豊川河口でノリ養殖に従事する者約 500 人、生産額 1 万円
1894	M27	5/28	空野甚七、ノリ養殖の功績により、県知事時任為基から表彰、木杯 1 個を贈呈される (M37 (1904) 8/3, 91 歳で死去)
			この頃、牟呂村の芳賀保治等が、六条潟でノリ養殖試験を開始
1896	M29		渥美郡牟呂村 (現豊橋市牟呂町) で、60 余名がノリ養殖開始 (H10 まで)
1897	M30		六条潟のノリ漁場大拡張計画に前芝村白魚漁師が反対、宝飯・渥美沿岸漁業組合の仲裁で解決
1898	M31		空野甚七の記念碑が建設 (「海苔創業者 空野甚七碑」と刻まれる)
			六条潟のノリ養殖が本格化 (豊川河口に 25 万坪のノリ漁場を設け 8 ヶ漁業組合の希望者がノリ養殖を開始)
1900	M33		「前芝のり」が「三河のり」と呼ばれるようになる
1901	M34		漁業秩序確立の基本法として「漁業法」が制定、漁業組合についても規定
1902	M35	5/	「漁業組規則」、「水産組規則」公布
		6/	水産組規則に基づき、県内関係 7 郡に海西・海東郡・愛知・碧海・宝飯・幡豆・宝飯・渥美の各郡水産組合設立 (事務所は各郡役場内) (知多郡のみ明治 40 年 (1907 年) に設立)
1903	M36		「漁業法」が施行
			県内に 108 漁業組合が設立 (107 とする資料あり)
			幡豆郡吉田村 (現西尾市吉田町) 3 漁協組合設立、ノリ養殖開始
			碧海郡大浜町前浜 (現碧南市前浜町) で、ノリ養殖開始 (S49 まで続く)
			この頃、豊川河口でノリ養殖に従事する者約 1,000 人、生産額 7 万円
1906	M39		渥美郡大崎村 (現豊橋市大崎町) で、ノリ養殖開始 (S45 まで続く)
			名古屋市の阿知輪兼吉、天白川河口に前芝村から種籐を移植 (「愛知の海苔」のり共販 20 周年記念)
			ノリ種付粗籐の移植が行われ、県内各地でノリ養殖が行われる
			東三河地区のノリ生産者、販売業者で「三河海苔改良組合」が設立 (ノリ増産と品質向上を目的としたが、未加入者多く、統一できず)
1907	M40		愛知郡笠寺村 (現名古屋市南区) で、ノリ養殖開始 (S38 まで続く)
			幡豆郡一色村栄生 (現西尾市一色町) で、ノリ養殖開始 (H23 まで続く)
			幡豆郡吉田村保定・宮崎 (現西尾市吉田町) で、ノリ養殖開始
			渥美郡伊川津村 (現田原市伊川津町) で、ノリ養殖開始
1908	M41		水産試験場、岡村金太郎博士 (日本海草学の開拓者) と協議し、宝飯郡前芝村 (現豊橋市) からノリ種籐を海部郡鍋田村 (現弥富市) へ移植したところ、成績良好 その後、ノリ養殖が海部郡飛島村、同郡十四山村 (現弥富市)、同郡南陽村 (現名古屋市港区) 方面に普及
			知多郡八幡村新知 (現知多市) で、ノリ養殖開始 (S38 まで続く)
1909	M42		鍋田村のノリ養殖が再興、近隣にも広がる (「愛知の海苔」のり共販 20 周年記念)
			幡豆郡一色村味沢・一色・衣崎 (現西尾市一色町) で、ノリ養殖開始
1912	M45		東三河ノリ養殖業者により「三河乾海苔同業組合」を設立し、三河海苔改良組合の業務を引き継ぐ (三河のりの声価を上げ、発展の要因となる)
1914	T3		渥美郡福江村 (現田原市福江町) で、ノリ養殖開始
1915	T4		幡豆郡寺津村 (現西尾市寺津町)、同平坂村 (現同平坂町) で、ノリ養殖開始
			牟呂 (現豊橋市)、御馬 (現豊川市御津町) で、ノリに施肥 (智利硝石、硫酸)

西暦	和暦	月日	事 項
1916	T5		知多郡横須賀町（現東海市）で、ノリ養殖開始（S38 まで続く）
1917	T6		海部郡飛島村で、ノリ養殖開始（S38 まで続く）
1918	T7		知多郡上野村（現東海市）で、ノリ養殖開始（S38 まで続く）
			渥美郡杉山村（現豊橋市杉山町）で、ノリ養殖開始（S45 まで続く）
1919	T8		水産試験場、「のり検査員」養成
			渥美郡田原町（現田原市）で、ノリ養殖開始
1921	T10		渥美郡老津村（現豊橋市老津町）で、ノリ養殖開始（S45 まで続く）
1922	T11		下之一色漁業組合、愛知郡下之一色町（現名古屋市中川区）に「浅海利用研究所」を設置 水産試験場、同研究所内に「養殖出張所」を設置し、ノリ・カキ養殖の試験を開始
			碧海郡大浜町（現碧南市）で、ノリ養殖開始（S38 まで続く）
			ノリ生産額、養殖漁場面積ともに、全国一となる
1924	T13		三河乾海苔同業組合、天皇陛下に三河のり 2 帖（200 枚）を献上（S12 まで続く）
			碧海郡高浜町（現高浜市）で、ノリ養殖開始（S38 まで続く）
1925	T14		知多郡八幡町八幡・平井、同郡旭村（以上現知多市）、同郡東浦村（現東浦町）で、ノリ養殖開始（S38 まで続く）
			碧海郡刈谷町（現刈谷市）で、ノリ養殖開始（S38 まで続く）
			愛知・三重海苔研究会を設置、ノリ移植事業の研究調整を開始
1926	T15		碧海郡新川町（現碧南市）で、ノリ養殖開始（S38 まで続く）
			宝飯郡大塚村（現蒲郡市大塚町）で、ノリ養殖開始（S62 まで続く）
			渥美郡泉村（現田原市泉町）で、ノリ養殖開始（H12 まで続く）
1928	S3		県条例で、のり製品検査規程を設け、県水産会に検査を委託、これ以降本県産乾ノリを「愛知海苔」と称す
			愛知郡熱田町（現名古屋市中熱田区）で、ノリ養殖開始（S38 まで続く）
			知多郡常滑町（現常滑市）で、ノリ養殖開始（H10 まで続く）
			幡豆郡幡豆町（現西尾市鳥羽町）で、ノリ養殖開始（S61 まで続く）
1929	S4	12/	「愛知県水産製品取締規則」制定
			海部郡十四山村（現弥富市）、同南陽村（現名古屋市中港区）、愛知郡下之一色町（現名古屋市中川区）で、ノリ養殖開始（S38 まで続く）
			宝飯郡塩津村（現蒲郡市竹谷町）で、ノリ養殖開始（S39 まで続く）
			宝飯郡三谷町（現蒲郡市三谷町）で、ノリ養殖開始（S63 まで続く）
1930	S5		この頃、水産試験場漁撈製造出張所が焼海苔・味付海苔の電熱式自動機器を開発普及 また、アサリ水煮缶詰が米国で高評価を得て、大量 2 万ケースを受注
			海部郡蟹江村（現海部郡蟹江町）、名古屋市南区港（現名古屋市中港区）で、ノリ養殖開始（S38 まで続く）
1932	S7		水産試験場、横須賀町養父（現東海市）で海苔網試験を実施
		12/	豊橋市長が日本人造羊毛（絹）の誘致を計画（S9/12、東三河沿岸漁民の反対により、人毛会社が断念）
1933	S8		ノリ養殖が沿岸漁業の生産額で 1 位となり、乾ノリの県営検査を開始
		11/	愛知県、「水産製品検査規則」制定
			三河乾海苔同業組合内部に生産者を対象とした「東三海苔振興会」と、乾海苔販売面を司る「海苔問屋組合」を設置



西暦	和暦	月日	事 項
1935	S10		この年のノリ生産，数量 139,814 千枚，金額 1,421 千円（金額内訳：海部郡 231，愛知郡 18，名古屋市 26，知多郡 335，碧海郡 70，幡豆郡 142，宝飯郡 305，豊橋市 234，渥美郡 56 千円）
1936	S11		ノリ養殖従事戸数は 6,746 戸（愛知県水産試験場六拾年史）
1938	S13		ノリ養殖従事戸数は 7,049 戸（愛知県水産試験場六拾年史）
1940	S15		渥美郡泉村宇津江（現田原市），同郡福江町清田・中山・小中山（現田原市）で，ノリ養殖開始
1941	S16		ノリ養殖経営体数は 7,144 経営体（愛知県水産試験場の現勢，S24/11 発行）
1942	S17		ノリ養殖従事戸数は 7,160 戸（愛知県水産試験場六拾年史）
1945	S20		ノリ養殖経営体数は 3,162 経営体（愛知県水産年表 S52）
1946	S21		ノリ養殖経営体数は 6,235 経営体（愛知県水産試験場の現勢，S24/11 発行）
1947	S22		福江湾でノリ種場漁場を開発
			ノリ養殖経営体数は 5,714 経営体（愛知県水産試験場の現勢，S24/11 発行），従事戸数は 6,235 戸（愛知県水産試験場六拾年史）
1948	S23		知多郡野間町（現美浜町）で，ノリ養殖開始
			ノリ養殖経営体数は 5,506 経営体（愛知県水産試験場の現勢，S24/11 発行）
1949	S24		イギリス人ドリュー女史，ノリ糸状体を発見
			ノリ養殖従事戸数は 5,506 戸（愛知県水産試験場六拾年史）
1950	S25		県営ノリ検査を廃止し，漁協による自主検査を開始
			この頃，ノリ養殖で，粗朶筥から水平筥への転換が始まる
			ノリ養殖経営体数は 8,191 経営体（愛知県水産要覧 1956） or 7,450 経営体（愛知県水産年表 S52）
1951	S26	10/14～15	「ルース台風」来襲，漁船 183 隻，角建網 117 統，ノリ粗朶 102 万株，漁港 18 件等，被害見込額 2 億円超
			ノリ単胞子による 2 次芽採苗が開始
			この頃，水産試験場がノリ養殖の「水平筥操作基準」を定め，水平筥養殖法普及の端緒となる（S31 までに一挙に普及）
			ノリ養殖経営体数は 8,431 経営体（愛知県水産要覧 1956）
1952	S27	10/	「浅海増殖開発事業」（ノリ，アサリ漁場造成）県直営で着手（S33 まで実施） 水産試験場，浅海開発用アングルドーザー 2 台（三菱 BB6 型×1，小松 D50 型×1）購入，ドーザー積載船「第 1，第 2 なぎさ丸」（18 トン，木船）建造 重機操縦者に前芝・渡津・牟呂・大崎・田原・塩津・衣崎漁協の推薦者 15 名を水産試験場職員に採用
			武豊漁協（知多郡武豊町），富貴漁協（知多郡富貴村，現武豊町），成岩漁協，半田漁協，乙川漁協，亀崎漁協（以上半田市）で，ノリ養殖開始（武豊・富貴漁協は S36 まで，成岩・半田・乙川・亀崎漁協は S38 まで続く）
			ノリ養殖経営体数は 8,543 経営体（愛知県水産要覧 1956）
1953	S28	4/5	東三海苔振興会，三河海苔創業百周年式典を盛大に開催（空野甚七・芳賀安治追悼会兼ねる）
			水産試験場，浅海開発用アングルドーザー 3 台（三菱 BB6 型×2，小松 D50 型×1）購入，ジェット耕耘船（5.3 トン，綱船）1 隻，曳航船「よそかぜ」（3 トン，木船）1 隻建造
			この頃，ノリ糸状体の培養，採苗試験が実施
			ノリ養殖経営体数は 9,035 経営体（愛知県水産要覧 1956）

西暦	和暦	月日	事 項
1954	S29	4/21	第1回愛知県のり研究発表大会（於名古屋市，水産会館）主催は愛知海苔協議会（漁連内部組織）
			愛知県漁連，ノリ共販開始
			水産試験場，浅海開発用ブルドーザー2台（日本特殊鋼 NTK6 型）購入，ドーザー積載船「第3なぎさ丸」（16トン，木船）建造
			小鈴谷漁協（知多郡小鈴谷町，現常滑市）で，ノリ養殖開始
			ノリ養殖経営体数は9,094経営体（愛知県水産要覧1956）or8,611経営体（農林水産統計 S31）
1955	S30	3/30	第2回愛知県のり研究発表大会（於名古屋市，水産会館）
			この頃，ノリ養殖人工採苗に目処，種網の県内需要に対処するため，宮城県・福島県・千葉県等からの種網移植導入が盛ん
			合成繊維ノリ網（クレモナ網）普及始める
			西浦漁協（宝飯郡西浦町，現蒲郡漁協，現蒲郡市）で，ノリ養殖開始（H17まで続く）
			東幡豆漁協（幡豆郡幡豆町，現西尾市）で，ノリ養殖開始（S61まで続く）
			ノリ養殖経営体数は10,151経営体（愛知の水産1957）or9,206経営体（愛知県水産年表 S52，農林水産統計 S31）
1956	S31	1/31	第3回愛知県のり研究発表大会（於名古屋市，水産会館）
		9/29	「六条潟漁業紛争覚書」締結（愛知の水産，P58～61，1957）
			水産試験場，ノリ室内人工採苗試験を開始
			豊丘漁協（知多郡豊浜町，現大井漁協，現南知多町）で，ノリ養殖開始
			ノリ養殖経営体数は9,024経営体（愛知県水産年表 S52，農林水産統計 S31）
1957	S32	4/19	第4回愛知県のり研究発表大会（於名古屋市，水産会館）
			水産試験場，浅海開発用アングルドーザー1台（三菱 BB6 型）購入，アングルドーザー2台（三菱 BB6 型×1，小松 D50 型×1）処分，ブルドーザー1台（日本特殊鋼 NTK6 型）処分，ドーザー積載船「第5なぎさ丸」売却
			常滑地先にノリ防波柵 300m 設置
			内海漁協（知多郡内海町，現豊浜漁協，現南知多町）で，ノリ養殖開始
			形原漁協（宝飯郡形原町，現蒲郡漁協，現蒲郡市）で，ノリ養殖開始（S63まで続く）
			ノリ養殖経営体数は6,751経営体（漁業の動き S38）or9,413経営体（愛知県水産年表 S52）
1958	S33	1/14	「愛知県板びき網合法化運動協議会」が発足
			水産試験場，浅海開発用ドーザー積載船「第1，第2なぎさ丸」売却
			常滑地先のノリ防波柵 600m 延長
			鬼崎漁協（常滑市）で，ノリ養殖開始
			佐久島漁協（幡豆郡一色町佐久島，現西三河漁協，現西尾市）で，ノリ養殖開始（S59まで続く）
			衣崎漁協矢作古川河口アオノリ漁場を浚渫掘削し，クロノリ漁場へ転換
			ノリ養殖経営体数は6,545経営体（漁業の動き S38）or10,082経営体（愛知県水産年表 S52）
1959	S34	1/17	昭和33年度水産業改良普及研究発表大会開催（於名古屋市，水産会館）
		4/28	第6回愛知県のり研究発表大会（於名古屋市，名古屋市町村会館）
			水産試験場，「浮流しノリ養殖技術」開発
			大井漁協（知多郡師崎町，現南知多町）で，ノリ養殖開始
			ノリ養殖経営体数は7,817経営体（漁業の動き S38）or10,013経営体（愛知県水産年表 S52）

西暦	和暦	月日	事 項
1960	S35	1/11	東三河海苔漁業協同組合連合会（豊橋市前芝町）が設立（S46：解散）
		1/18	昭和 34 年度水産業技術改良普及研究発表大会開催（於名古屋市，水産会館）
		7/29	第 7 回愛知県のみ研究発表大会（於名古屋市，名古屋市町村会館）
			この頃，ノリ養殖で糸状体の培養・採苗が全県に普及
			大野漁協（常滑市，現鬼崎漁協）で，ノリ養殖開始
			豊浜（知多郡豊浜町，現南知多町）で，ノリ養殖開始
			師崎・片名（以上知多郡師崎町，現南知多町）で，ノリ養殖開始
			大井漁協で浮流し式ノリ養殖が開始 ノリ養殖経営体数は 8,038 経営体（愛知県水産要覧 1965，漁業の動き S38） or 11,256 経営体（愛知県水産年表 S52）
1961	S36	1/10	昭和 35 年度水産業改良普及研究発表大会開催（於名古屋市，水産会館）
			第 1 次沿岸漁業構造改善事業の第一の柱に「漁船漁業（特に小型底びき網）のノリ養殖への兼業化，転業」をうたう
		4/1	構造改善地区に水産業改良普及員を設置（所属は水産課，単独現地駐在制，4 名体制でスタート，S39 には 12 名体制，S40 に知多・西三河・東三河事務所に水産課が設置されたのに伴い事務所へ配置）
		4/28	第 8 回愛知県のみ研究発表大会（於豊橋市，豊橋市公会堂）
			ノリ養殖で，この頃から数年間，ヘリコプターや施肥船で大掛りな集団施肥を実施 ノリ養殖経営体数は 8,305 経営体（愛知県水産要覧 1965，漁業の動き S38） or 11,431 経営体（愛知県水産年表 S52）
1962	S37	1/13	昭和 36 年度水産業改良普及研究発表大会開催（於名古屋市，水産会館）
		4/	第 1 次沿岸漁業構造改善事業開始（実績：S37～40，愛知県，常滑市，半田市，西尾市，蒲郡市，豊橋市，美浜町，南知多町，一色町，吉良町，幡豆町，御津町，田原町，渥美町，赤羽根町で 131 件，775 百万円）
		4/26	第 9 回愛知県のみ研究発表大会（於名古屋市，名古屋市町村会館）
			水産試験場，浅海開発用アングルドローザー 3 台（三菱 BB6 型×2，小松 D50 型×1）処分，ブルドローザー 1 台（日本特殊鋼 NTK6 型）処分，ドローザー積載船「第 3 なぎさ丸」売却
			水産試験場が，食品工業試験場の協力を得て，「ノリ種網冷蔵試験」に着手
			竹島漁協（蒲郡市（府相・小江），現蒲郡漁協）で，ノリ養殖開始（H13 まで続く）
			ノリ養殖経営体数は 8,670 経営体（愛知県水産要覧 1965，漁業の動き S39） or 11,414 経営体（愛知県水産年表 S52）
1963	S38	1/18	昭和 37 年度水産業改良普及研究発表大会開催（於名古屋市，水産会館）
		2/26～ 27	第 1 回乾海苔品評会（於名古屋市，水産会館）
		4/26	愛知県のみ研究発表 10 周年記念大会（於豊橋市，豊橋市公会堂）
		8/	「沿岸漁業等振興法」が公布
			県は「愛知地域沿岸漁業構造改善計画」（第 1 次沿構）を策定し，「漁船漁業からノリ養殖へ」の誘導計画を盛り込む ノリ養殖経営体数は 10,029 経営体（愛知県水産要覧 1965） or 10,937 経営体（愛知県水産年表 S52）
1964	S39	2/15～ 16	第 2 回乾海苔品評会（於名古屋市，水産会館）

西暦	和暦	月日	事 項
1964	S39	4/23	昭和 38 年度（第 11 回）愛知の水産研究発表大会開催（於豊橋市，豊橋市公会堂）（水産業改良普及研究発表大会と愛知県のり研究発表大会を統合）
		10/15	県漁連，のり共販十周年記念式開催（於名古屋市，名古屋観光ホテル） （記念誌「海苔共販十年のあゆみ」を頒布）
			水産試験場，「ノリ種網の冷凍保蔵技術」を開発
			ノリ養殖経営体数は 9,944 経営体（愛知県水産要覧 1965） or 10,210 経営体（愛知県水産年表 S52）
1965	S40	2/3～4	第 3 回乾海苔品評会（於名古屋市，水産会館） （40 年度ノリ漁期が凶作で以後中断）
		4/1	県知多・西三河・東三河事務所に「水産課」を設置 水産業改良普及員を県事務所水産課に配置（15 名体制）
		4/21	昭和 39 年度（第 12 回）愛知の水産研究発表大会開催（於豊橋市，豊橋市公会堂）
			ノリ網過密化が一因で，ノリ養殖の大凶作
			ノリ養殖経営体数は 9,318 経営体（愛知県水産年表 S52）
1966	S41		全国海苔漁連が，「2 月 6 日」を「海苔の日」に定める
		4/20	第 13 回愛知の水産研究発表大会開催（於豊橋市，豊橋市公会堂）
			就業者 1 人当たり生産所得で，漁業がノリ不作の影響により製造業に逆転される
			ノリ養殖，前年に引続き凶作（ノリ養殖天災融資適用を国に陳情）
			牟呂漁協でズボ式野外採苗始まる
			ノリ養殖経営体数は 9,080 経営体（愛知県水産年表 S52）
1967	S42	4/26	第 14 回愛知の水産研究発表大会開催（於蒲郡市，蒲郡市中央公民館）
			水産試験場，渥美外海ノリ漁場造成試験を本格化
			各地に「ノリ生産安定対策協議会」を設置し，種付け網枚数制限を開始
			ノリ養殖経営体数は 8,610 経営体（愛知県水産年表 S52）
1968	S43	4/26	第 15 回愛知の水産研究発表大会開催（於常滑市，常滑市体育館）
		5/23	西三河海苔種網冷蔵漁業協同組合連合会が設立（幡豆郡一色町，現西尾市，海苔種網冷蔵保管）
			ノリ養殖で，佐久島漁協研究会が「浮上筏」を考案
			ノリ生産，40 年来の不作から全国一に返り咲き（要因：冷蔵網，密植防止，浮流）
			日間賀島漁協（知多郡南知多町）で，ノリ養殖開始
			ノリ養殖経営体数は 8,612 経営体（愛知県水産年表 S52）
1969	S44	4/25	第 16 回愛知の水産研究発表大会開催（於蒲郡市，蒲郡市中央公民館）
			篠島漁協（知多郡南知多町）で，ノリ養殖開始
			ノリ養殖経営体数は 7,435 経営体（愛知県水産年表 S52）
1970	S45	3/23～ 24	第 4 回乾海苔品評会（於名古屋市，水産会館） （出品点数 178 点 1 万枚を県民生部を通じて老人福祉施設に寄贈，県知事感謝状を受ける）
		5/1	第 17 回愛知の水産研究発表大会開催（於西尾市，西尾市体育館）
			愛知県漁連，「半田のり共販所」を新設
			赤羽根漁協（渥美郡赤羽根町）（現愛知外海漁協，現田原市赤羽根町）で，ノリ養殖開始（H8 まで続く）
			ノリ養殖経営体数は 7,015 経営体（愛知県水産年表 S52）



西暦	和暦	月日	事 項
1971	S46	3/1～2	第5回乾海苔品評会（於半田市，漁連半田海苔共販所） （出品物他2万枚を県民生部を通じて老人福祉施設に寄贈）
		4/27	第18回愛知の水産研究発表大会開催（於常滑市，常滑市体育館）
		12/6	東三河海苔漁業協同組合連合会が解散
			愛知県漁連，「豊橋のり共販所」を新設
			ノリ養殖経営体数は6,274経営体（愛知県水産年表S52）
1972	S47	2/8～9	第6回乾海苔品評会（於一色町，漁連一色海苔共販所） （出品物を全漁連に販売委託し，売上代金を漁船海難遺児育英会に寄附）
		4/1	水産業改良普及員を事務所水産課に配置（広域指導体制を確立）
		4/21	第19回愛知の水産研究発表大会開催（於蒲郡市，蒲郡市体育館）
			渥美外海でノリ養殖開始（赤羽根町沖合距岸900mに区画漁業権設定）
			ノリ養殖経営体数は5,732経営体（愛知県水産年表S52）
1973	S48	2/15～16	第7回乾海苔品評会（於豊橋市，漁連豊橋海苔共販所） （出品物を団地等で販売し，売上金を漁船海難遺児育英会に寄附）
		5/2	第20回愛知の水産研究発表大会開催（於西尾市，西尾市体育館）
		10/6	第4次中東戦争が勃発（OPECによる原油生産削減，禁輸措置で原油価格が暴騰，第1次オイルショック）
			ノリ養殖で，生産量10億枚を超え，史上最高の大量生産 繰越在庫の増加で，価格低迷，経営を圧迫，計画生産のS49漁期導入の端緒となる
			ノリ養殖経営体数は5,319経営体（愛知県水産年表S52）
1974	S49	1/31～2/1	第8回乾海苔品評会（於美浜町，野間漁協） （出品物他2万枚を県民生部を通じて社会・児童福祉施設に寄贈し，県知事感謝状を受ける）
		4/26	第21回愛知の水産研究発表大会（於常滑市，常滑市民体育会館）
		11/8	県漁連，のり共販20周年記念式典開催（於名古屋市，県産業貿易会館）
			全漁連，ノリ計画生産開始
			ノリ養殖経営体数は4,262経営体（愛知県水産年表S52）
1975	S50	3/3	東亜共石名古屋製油所で「ゴールドサイレン号」が原油流出事故，知多半島西岸のノリ養殖に被害
		4/24～25	第9回乾海苔品評会（於蒲郡市，蒲郡市民会館） （出品物を売却し，売却代金を漁船海難遺児育英会に寄附）
		4/25	第22回愛知の水産研究発表大会（於蒲郡市，蒲郡市民会館）
			ノリ養殖で，全自動製造機が出現
			ノリ養殖経営体数は3,684経営体（愛知県水産年表S52）
1976	S51		リベリア貨物船「ラモナ号」ノリ漁場に突入
		4/27～28	第10回乾海苔品評会（於吉良町，吉良町公民館） （出品物を売却し，売却代金を漁船海難遺児育英会に寄附）
		4/28	第23回愛知の水産研究発表大会（於吉良町，吉良町公民館）
		5/13	全国海苔大会開催（本県初）
			ノリ養殖経営体数は3,197経営体（農林水産統計S56）
1977	S52	4/22～23	第11回乾海苔品評会（於常滑市，常滑市体育館） （出品物を売却し，売却代金を漁船海難遺児育英会に寄附）
		4/23	第24回愛知の水産研究発表大会（於常滑市，常滑市体育館）

西暦	和暦	月日	事 項
1977	S52		この頃、豊橋地区でノリ陸上人工採苗が普及
			ノリ養殖経営体数は 2,934 経営体（農林水産統計 S56）
1978	S53	4/21～ 28	第 12 回乾海苔品評会（於蒲郡市、蒲郡市市民会館）
		4/28	第 25 回愛知の水産研究発表大会（於蒲郡市、蒲郡市市民会館）
			ノリ養殖経営体数は 2,794 経営体（農林水産統計 S56）
1979	S54	1/19	昭和四日市石油アウトリーパーバスで「ワールドエンデバー号」の荷揚げ中に原油流出事故発生（四日市、磯津、楠町、鈴鹿のノリ養殖に被害）
		4/23～ 27	第 13 回乾海苔品評会（於吉良町、吉良町公民館）
		4/27	第 26 回愛知の水産研究発表大会（於吉良町・吉良町公民館）
			第 1 回愛知・三重両県海苔対策協議会開催
			ノリ養殖史上最高金額（9.3 億枚、163 億円）
			ノリ養殖経営体数は 2,658 経営体（農林水産統計 S56）
1980	S55	4/18～ 22	第 14 回乾海苔品評会（於常滑市、常滑市役所）
		4/22	第 27 回愛知の水産研究発表大会（於常滑市・常滑市役所）
			この頃、全自動ノリ製造機普及
			ノリ養殖経営体数は 2,604 経営体（農林水産統計 S60）
1981	S56	4/25～ 28	第 15 回乾海苔品評会（於名古屋市、水産会館）
		4/28	第 28 回愛知の水産研究発表大会（於名古屋市・水産会館）
			この頃、ノリのフリー糸状体が普及
			ノリ養殖経営体数は 2,499 経営体（農林水産統計 S60）
1982	S57	4/16～ 23	第 16 回乾海苔品評会（於名古屋市、水産会館）
		4/23	第 29 回愛知の水産研究発表大会（於名古屋市・水産会館）
		5/20	全国海苔大会開催（於蒲郡市市民会館）
			この頃、ノリ浮流網人工干出装置の開発
			ノリ養殖経営体数は 2,352 経営体（農林水産統計 S60）
1983	S58	4/	養殖ノリの天敵である壺状菌が伊勢湾で昨年秋から大発生していたことが判明
		4/20～ 27	第 17 回乾海苔品評会（於名古屋市、水産会館）
		4/27	第 30 回愛知の水産研究発表大会（於名古屋市・水産会館）
			ノリ養殖経営体数は 2,273 経営体（農林水産統計 S60）
			史上最高のノリ生産枚数を更新（10.7 億枚）
			この頃、ノリ原藻攪拌装置の開発・普及
1984	S59	4/19～ 27	第 18 回乾海苔品評会（於名古屋市、水産会館）
		4/27	第 31 回愛知の水産研究発表大会（於名古屋市・水産会館）
		10/25	県漁連のり共販開設 30 周年記念式典開催（於名古屋市、県産業貿易会館）

西暦	和暦	月日	事 項
1984	S59		ノリ養殖経営体数は2,112経営体（農林水産統計 S60）
1985	S60	4/26	第32回愛知の水産研究発表大会（於名古屋市・水産会館）
		4/26	第19回愛知県乾のり品評会（於名古屋市・水産会館）
			ノリ養殖経営体数は1,895経営体（農林水産統計 S60）
1986	S61	4/25	第33回愛知の水産研究発表大会（於名古屋市・水産会館）
		4/25	第20回愛知県乾のり品評会（於名古屋市・水産会館）
			ノリ養殖経営体数は1,746経営体（農林水産統計 H1）
1987	S62	1/7～2/4	伊勢湾北中部に赤潮発生，ノリに色落ちなどの漁業被害
		4/28	第34回愛知の水産研究発表大会（於西尾市・西尾勤労会館）
		4/28	第21回愛知県乾のり品評会（於西尾市・西尾勤労会館）
			ノリ養殖で「酸処理剤」の使用開始
			ノリ養殖経営体数は1,576経営体（農林水産統計 H1）
1988	S63	4/26	第35回愛知の水産研究発表大会（於名古屋市・水産会館）
		4/26	第22回愛知県乾のり品評会（於名古屋市・水産会館）
		5/19	第38回浅海増殖研究発表全国大会が開催（於蒲郡市・市民会館）
			ノリ養殖経営体数は1,463経営体（農林水産統計 H1）
1989	H1	4/19	第36回愛知の水産研究発表大会（於常滑市）
		4/19	第23回愛知県乾のり品評会（於常滑市）
			ノリ養殖経営体数は1,357経営体（農林水産統計 H1）
1990	H2	4/18	第37回愛知の水産研究発表大会（於西尾市）
		4/18	第24回愛知県乾のり品評会（於西尾市）
		11/	伊勢湾のノリは台風などの影響で昭和46年以来の不作，価格も低迷
			ノリ養殖経営体数は1,248経営体（農林水産統計 H7）
1991	H3	4/25	第38回愛知の水産研究発表大会（於名古屋市）
		4/25	第25回愛知県乾のり品評会（於名古屋市）
			ノリ養殖経営体数は1,124経営体（農林水産統計 H7）
1992	H4	5/7	愛知県漁連「海苔流通センター」竣工（於半田市）
		5/15	第39回愛知の水産研究発表大会（於半田市）
		5/15	第26回愛知県乾のり品評会（於半田市）
			ノリ養殖経営体数は1,015経営体（農林水産統計 H7）
1993	H5	5/11	第40回愛知の水産研究発表大会（於半田市・海苔流通センター）
		5/11	第27回愛知県乾海苔品評会（於半田市・海苔流通センター）
			ノリ養殖経営体数は967経営体（農林水産統計 H7）
1994	H6	4/26	第41回愛知の水産研究発表大会（於名古屋市・水産会館）
		4/26	第28回愛知県乾海苔品評会（於名古屋市・水産会館）
		9/9	愛知県水産振興大会（漁連海苔共販開設40周年記念式典，於名古屋市）
			ノリ養殖経営体数は935経営体（農林水産統計 H7）
1995	H7	5/18	第42回愛知の水産研究発表大会（於半田市・海苔流通センター）
		5/18	第29回愛知県乾海苔品評会（於半田市・海苔流通センター）
		6/1	第45回浅海増殖研究発表全国大会（於蒲郡市）
		6/2	愛知のりフォーラム'95（於蒲郡市）

西暦	和暦	月日	事 項
1995	H7		ノリ養殖経営体数は 935 経営体（農林水産統計 H7）
1996	H8	4/26	第 43 回愛知の水産研究発表大会（於半田市・海苔流通センター）
		4/26	第 30 回愛知県乾海苔品評会（於半田市・海苔流通センター）
			ノリ養殖経営体数は 894 経営体（農林水産統計 H13）
1997	H9	5/13	第 44 回愛知の水産研究発表大会（於半田市・海苔流通センター）
		5/13	第 31 回愛知県乾海苔品評会（於半田市・海苔流通センター）
		8/29	中部空港調査会などは、新空港建設による「漁業影響調査結果」を公表（①埋立てにより流れが西側に偏ることからノリ養殖等に影響、②干潟、浅場、藻場の消滅による漁場、生育場、浄化の場の減少、③影響緩和策として干潟等の造成、水産資源の増大対策等）
			ノリ養殖経営体数は 838 経営体（農林水産統計 H13）
1998	H10	4/21	第 45 回愛知の水産研究発表大会（於半田市・海苔流通センター）
		4/21	第 32 回愛知県乾海苔品評会（於半田市・海苔流通センター）
			ノリ養殖経営体数は 801 経営体（農林水産統計 H13）
1999	H11	5/11	第 46 回愛知の水産研究発表大会（於半田市・海苔流通センター）
		5/11	第 33 回愛知県乾海苔品評会（於半田市・海苔流通センター）
			ノリ養殖経営体数は 757 経営体（農林水産統計 H13） or 531 経営体（水産業の動き 2006）
2000	H12	4/25	第 47 回愛知の水産研究発表大会（於半田市・海苔流通センター）
		4/25	第 34 回愛知県乾海苔品評会（於半田市・海苔流通センター）
		9/11～12	東海地方は記録的な集中豪雨（東海豪雨）、ノリ養殖・ウナギ養殖・漁船への被害の外、河川から大量のゴミが海に流出
		9/中旬～下旬	東海豪雨で県内の伊勢湾沿岸の海岸に大量のゴミが漂着、各地で海岸の大掃除が行われる（場所によっては 10 月中旬まで続く）
			ノリ養殖経営体数は 567 経営体（農林水産統計 H13） or 539 経営体（水産業の動き 2006）
2001	H13	4/23	第 48 回愛知の水産研究発表大会（於半田市・海苔流通センター）
		4/23	第 35 回愛知県乾海苔品評会（於半田市・海苔流通センター）
		5/31	第 51 回浅海増殖研究発表全国大会（於常滑市）
			ノリ養殖経営体数は 543 経営体（農林水産統計 H18） or 507 経営体（水産業の動き 2006）
2002	H14	4/23	第 49 回愛知の水産研究発表大会（於半田市・海苔流通センター）
		4/23	第 36 回愛知県乾海苔品評会（於半田市・海苔流通センター）
			ノリ養殖経営体数は 515 経営体（農林水産統計 H18） or 482 経営体（水産業の動き 2006）
2003	H15	4/22	第 50 回愛知の水産研究発表大会（於半田市・海苔流通センター）
		4/22	第 37 回愛知県乾海苔品評会（於半田市・海苔流通センター）
			ノリ養殖経営体数は 481 経営体（農林水産統計 H18） or 464 経営体（水産業の動き 2006）
2004	H16	4/27	第 51 回愛知の水産研究発表大会（於半田市・海苔流通センター）
		4/27	第 38 回愛知県乾海苔品評会（於半田市・海苔流通センター）
			ノリ養殖経営体数は 468 経営体（農林水産統計 H18） or 445 経営体（水産業の動き 2006）
2005	H17	4/26	第 52 回愛知の水産研究発表大会（於半田市・海苔流通センター）（最終回）
		4/26	第 39 回愛知県乾海苔品評会（於半田市・海苔流通センター）（最終回）
			ノリ養殖経営体数は 454 経営体（農林水産統計 H18） or 406 経営体（水産業の動き 2012）
2006	H18	1/20	日韓ノリ IQ 合意（韓国 IQ 枠を H18 が 3.4 億枚、10 年後に 12 億枚まで拡大）
		2/1	西三河漁協が西三河海苔種網冷蔵漁連を包括承継



西暦	和暦	月日	事 項
2006	H18	2/28	H18 ノリ IQ 枠発表（韓国 3.4 億枚，中国 2.3 億枚）
		6/17	平成 18 年度愛知の水産研究活動報告会（於名古屋市・水産会館）（初回）
			ノリ養殖経営体数は 426 経営体（農林水産統計 H18） or 380 経営体（水産業の動き 2012）
2007	H19	3/22	鬼崎新港・海苔加工団地整備に関する常滑市長等との会合（於常滑市・常滑市役所）
		6/23	平成 19 年度愛知の水産研究活動報告会（於名古屋市・水産会館）
			ノリ養殖経営体数は 355 経営体（水産業の動き 2012）
2008	H20	3/	愛知県水産要覧 2008 を作成
		3/5	平成 19 年度水産試験場研究発表会（於蒲郡市・水産試験場）
		5/31	平成 20 年度愛知の水産研究活動報告会（於名古屋市・水産会館）
			ノリ養殖経営体数は 342 経営体（水産業の動き 2012）
2009	H21	6/13	平成 21 年度愛知の水産研究活動報告会（於名古屋市・水産会館）
			ノリ養殖経営体数は 314 経営体（水産業の動き 2012）
2010	H22	6/5	平成 22 年度愛知の水産研究活動報告会（於名古屋市・水産会館）
			ノリ養殖経営体数は 279 経営体（水産業の動き 2012）
2011	H23	6/11	平成 23 年度愛知の水産研究活動報告会（於名古屋市・水産会館）
			ノリ養殖経営体数は 254 経営体（水産業の動き 2013）
2012	H24	2/27	「あいちの四季の魚」8 種類を公表 春（アサリ，コウナゴ），夏（ウナギ，シラス），秋（ガザミ，スズキ），冬（トラフグ，ノリ）
		4/2	高栄養繁殖性ノリ品種「あゆち黒吉（くろきち）」が種苗法に基づき，品種登録
		6/9	平成 24 年度愛知の水産研究活動報告会（於名古屋市・水産会館）
			ノリ養殖経営体数は 233 経営体（水産課調べ）
2013	H25	6/15	平成 25 年度愛知の水産研究活動報告会（於名古屋市・水産会館）
		11/27	ノリ高水温耐性品種「あゆち黒誉れ」を種苗法に基づき品種登録出願
		12/1	あいちの四季の魚（冬：ノリ）の PR で，県知事が第 1 回共販に参加（於半田市・愛知県漁連海苔流通センター）
			ノリ養殖経営体数は 215 経営体（水産業の動き 2014）